

がですか？ はい、大丈夫ですね。なかなかこの場では質問しにくいと思いますが、終わった後で登壇者をつかまえばいいと思いますので、その場で質問していただければいいかなと思います。それでは中身に入っていきたいと思いますが、白神さんは行政の立場から、吉田さんと高橋さんは現役で、萩という都市もあれば農村もあるところで、自分たちの活動を作っていると思いますが、おもしろいと思ったのは、吉田さんの活動は農村部ではなくて街中の、サードプレイスと紹介されていましたが、若者を中心とした人たちと外の人たちがつながる場だと思いますが、地域おこし協力隊というのは地域からすると地域を興してくれるんでしょという見方をされるんですね、どうしても。その時に吉田さんの感覚としてこういう活動を通じて何か変化の実感を感じていらっしゃるかどうか。あるいはそれを傍から見ている白神さんからして吉田さんの活動をどう見ているか。ちょっとご紹介いただければと思いますがいかがでしょうか。

吉田／僕の今の活動は企画中心で、今、ヨシダキカクというかたちでやっています。企画していくことで、行政職員の方でも自分も参加したいという声を聞いたり、たとえば児童館とか道の駅の駅長さんや商店街の会長さんから声がかかって、企画や活動などに入ってほしいと言われたり、そういう変化があったかなと思います。

田口／そういう意味で言うと、田舎の弱点というか、田舎は、ちょっときれいな企画をするようなことがあまり得意でないということがあって、いろいろな企画をするけどちょっと中途半端になってしまうことがある時に、吉田さんのやられている活動が地域の人たちに、こういうことをやればこういう人たちが集まるよということを見える化しているということなのかなという気がしていて、今おっしゃったように、地域の商店街の人が、何か吉田さんと組むとおもしろいことができるかもしれないという気持ちになってくるというのはかなり前向きな話だと思います。

そういう意味で言うと、地域おこし協力隊の「興す」という意味を今盛んにKPIだとか移住者がどれくらい増えたとか定住率がどうのこうのということではなくて、今地域に住んでいらっしゃる方が、何か新しいことをしかけようかという気になっているのはひとつ大きなポイントなんですかね。白神さんからするとどんな感じですか？

白神／吉田君の履歴書を見たときに、いい顔をしてるな、こいつは間違いのないなと思いました。企画課長に「これは萩市の農業を背負って立つから」と懇願して、来てもらいました。今は、彼が地域のハブとして動いてくれないかと思っています。彼もいろいろな技を持っているので、駅員のような誘導係、行政の下請けになってはいけなんでしょうが、移住者目線での誘導係。「あなたのそういった思いであればたとえば福栄地域に行ったらいいと思いますよ」的なアドバイスをしてもらいたいなと思っています。

田口／駅員さんみたいな差配をしてくださいということ。吉田さんは納得という感じですか？

吉田／そうですね。僕たち協力隊って、行政半分、民間半分みたいな立場で、客観的に見ていてお互いに誤解しあっているなと感じることがあります。行政の方たちはすごい仕事量で、民間の人たちも日々いっぱいいっぱいだと思いますが、お互いにもうちょっとつながって、肩書きをおろしてつきあって新しいことに向かっていくとか、サードプレイスが必要なのでは、と思います。せっかくみんな魅力があったりスキルがあったりするのにもったいないなという感じがあります。

田口／みんな自分の仕事に力が入りすぎてしまっていて、ほかの理解というか、がんじがらめになっているのを解きほぐしてあげる場としてヨシダズナイトがあると。そういう場って、行政の人、固く力が入っている人だとなかなか思いつけない、しかもずっとやり続ける。移住者や外の人がポンと入って

みてくれると「こんなにお気楽でいいんだ」という感覚が作られているというのは面白い場所だという気がします。

だから今、街中でやられていることだと思うのですが、これって街中でなくて農村は農村でできることはあると思うし、ひょっとしたら藤井さんがやられている人づくりみたいなこともそういう場所の要素がある気がしないでもないのですが、そういうふうなところなのかなと思いました。

続いて、高橋さんの話を聞いていておもしろいと思ったのは、1年目2年目3年目、それぞれ活動が変わっていくわけですね。それで、おそらく、1年目2年目の中で、しかもはっきりした立場ではないと吉田さんもおっしゃっていましたが、いろいろ悩みながら相談しながらやってきたんですが、そういう時ってどういうふうに誰に悩みや相談事をぶつけて、それに対してどう応えてもらって、それが自分にとってよかったのか悪かったのか、そういうことはどうやってこなしていってましたか？

高橋／そうですね、悩みを打ち明けられるような形といいますか、企業であればかばってくれる上司がいたり、一緒にやっついこうという後輩がいたり、そういう人がまわりにいないかということで探しました。ゼロではなかったです。ですが、あまりに数が少ないということと、民間というより行政の立場の人が多かったので、ちょっとそこがやりづらかったといいますか、どうしても行政の立場がありますので、一定以上のことには踏み込めないということがありました。ですので、相談ができたとしてもちょっと限界があったかなと。

あとは外に目を向けようと思ひまして、萩市以外、私の前職が東京、博多、広島などに元上司や仲間が多々おりましたので、1年目2年目、関係する業界の人も知り合いの人もできたので、そういう人に相談して、時には博多や広島に赴いて話を聞いてもらったり、一緒にやってもらえないかとお願いをしたり、それで外の情報を得たり、こんなことがあってこんな動き方をしたらいいのではないかと、いったアドバイスはもらうようにして、自分の中でい

ろいろ葛藤しながらバランスを確保しながらなんとかやってきたということです。

田口／それでいうと、地域の中には相談する相手はいなくて外にいる知人友人に、でも外にいる人は地域のことはわからないから、なかなか難しいところはありますよね。

高橋／そうですね。でもこうやって田口先生や、藤井さんみたいに地域で活動をしている人たちだったりするので、おおよそ予想はつく、どこの町も一緒だねといった感じ。役所の人が変わっているだけで、だいたい地方の事情は一緒だったりするので、こういう人がキーパーソンでこういう人をこうつくつくこうなるみたいな話をするとよりよいアドバイスをもらうということはありませんね。

田口／そうやって悩みを吐露できる場があるかどうかということがメンタルバランスを維持するのに大事だった時に、今おふたりの話を聞いていると結構自分なりに工夫してそれを作っているということだと思いますが、ちなみに白神さんは、14人いると全員ばらばらですね、考え方も人生観も価値観も活動も。それを担当されてどうですか？ しかも皆さん悩みを持っていて。

白神／はい、最初に14人のメンバーを見た時には「3年B組！」みたいな感じで感じてしまいました。その日からいろいろなことが起きますし、この人たちは何を考え、何を求めているんだみたいな。ただ、彼ら彼女らからは、常に、大きなパワーを感じています。新しい動きをしてくれています。地域にとって発見もあります。新鮮さも感じています。

協力隊の皆さんは、いろいろな意味ですごくストレスを抱えています。高橋さんなんか東京都心のバリバリのキャリアウーマンで、それがいきなり農家の嫁ですから、180度生活、人生が変わられたので。それもまた役所の人間として来られましたので。

当初、彼女のパワーは受け止めきれませんでしたし

た。彼女の発想自体が斬新で、役所の固定した概念にないことを常に求めているので、こちらも、それに対してどうパスを返していくかということについて、常に、真剣勝負で取り組んでいます。

田口／協力隊って、今日のふたりもそうですが、すごく頭の切れる人が多いんですね。そうすると役場の職員としてとてもつらくて、たぶん、事例とか持ってきて、こんな地域でこんな取組があって、なぜこの地域、役所ではできないんだって突き上げがすさまじいですよね。一方で、「おまえ、移住してきたのに何偉そうなことを言ってるんだ」ってかちんともくともあると思うのですが、そういうのってどうされているんですか？

白神／市長から、市民ファースト、市民目線で物事を考えていくんだと常に言われてます。従来の前例踏襲ではない、新たな目線でやっていけと言われてます。私自身も、地域おこし協力隊の担当として、彼ら、彼女らと一緒に、常に、新たな切り口で地域づくりを考えて、新しい風をおこしたいと思っています。

田口／そういう意味で言うとお互いの立場を利用しあいながら、うまくやっついこうという感じなんですか。ちなみに藤井さんはいろいろなことをやっておられますが、美作の協力隊はすごい台風みたいな、嵐を起こしてきていると思いますが、実際にずっとやってきて、後輩の動きとか、いろいろな担当職員をたくさん見てこられたと思いますが、その中でどういうことを押さえておくと、隊員にしても担当職員にしても、白神さんみたいに柔らかく回すことができ、どういうところが抜けるとお互いがんじがらめで厳しくなってしまうというのはどうでしょう？ ご経験も含めて。

藤井／そうですね。吉田さんが少し言われたのですが、価値観が、もしくは民間からしたら行政の仕組みがわからないわけです。それがコミュニケーションの中で出てくるのです。

予算の話とか、これはできるできないとかがパシッと決まってきたりして、そこがわからないゆえに、なんでできないんだろう、そこにミスコミュニケーションが生まれるというようなことは見てきました。

それから、協力隊自身がやりたいことを持ってくる人もいますが、自分のやりたいことは、できるんだというだけで来るとまずいかなと思っています。僕の周りでもあるのですが、やはり自治体職員もしくは地域の人たちと一緒に作るんだという意識がお互いにあるかどうかだと思います。

これがやりたいですとそれだけの話になってきた場合は、ほぼ関係性が崩れてダメになるということとは今までの経験からするとあるかなと思います。

田口／自分本位になりすぎるといろいろ問題だし、地域本位になると自分が倒れてしまうし、今日の萩のおふたりは、たぶん14名中うまくいっているおふたりだと思います。

それで、たぶん白神さんの頭の中には頭の痛い人と悩ましい人と、安心して見ていられる人がいると思いますが、今の藤井さんみたいに、どうしても今の協力隊は自己実現の手法として知られているところがあると思います。

だから、どこかで手綱を引かないといけないとか、軌道修正をしなくてはいけないとか、ご自身の経験もあるかもしれませんが、おふたりも含めて、そのあたりとか、ちょっと違うと思った時にどうコントロールしているかとか、もし経験がありましたら。

白神／私は、新規就農について15年くらいやってきました。この中で、すぐにでも萩に行って就農したいんですという相談がすごく多い時代がありました。私はそういった方には、仕事をやめたいから農業なのか、本当に農業がやりたいから農業なのかを、じっくり聞くこととしておりました。そうすると、そのうち仕事の相談に変わってしまう人が7割です。電話ですっと聞いていると、「実は上司が」ということになって、そのうちそれは男同士で解決したほうがいいですよということになると電話もかかっ



てこなくなるということもありました。

地域おこし協力隊は、年限が3年と制度上決まっていますが、それは一つの通過点です。仕事や将来について、じっくり考えることも大事です。私のところに、いつでも相談や愚痴を言いに来てください。

田口／協力隊って3年しか任期がないので3年の中でどういう成果を出すかって担当職員は財政事務局から結構言われるんですね。藤井さんがおっしゃったように、一瞬の新幹線のように通過していくのか、走馬灯のように振り返れるのかというのは大きな違いがあって、白神さんの話からすると、身の上相談みたいな感じだと思うのですが、そういう柔らかい話をしながら暗に諭していくみたいな手法、テクニックをお持ちなのは、たぶん熟年の農業者とずっとおつきあいをされてきた経験で、よく協力隊員が地域と関係づくりをする参考書として農業指導員のテキストに出ている関係づくりの項がすごく勉強になるとよく言われるのですが、そういう意味でいうと、農家さんたちとつきあってきて、あのスピード感覚、のらりくらりのんびり、すごく忙しいんですが、変化に対してはわりと柔らかい人、若い人はどうしてもスピード感とか「明日から」とか「お金!」とかになってしまう、そのあいだを「だめだ!」というのではなくて、「いやあ、もうちょっとゆっくり考えて」というこの白神節でとくとくと諭しているんですかね。そういう感覚はどこかで必要なのかなという気もします。

でもそれでいうと、高橋さんみたいにバリバリの

キャリアが農家の嫁で、婦人会とかでイライラすることもだぶん多いでしょうし、いろいろ改革したい気持ちがふつふつとわいてくると思うのですが、そのあたりの自分のはやる気持ちと白神さんの少しゆったり構える気持ちと、コントロールって何かされていますか？

高橋／農家のおかあさんたちや萩の人たちはスピード感が違ってイライラすることはあまりないです。地域のムードというか、ここであらがってどうしようとしたってどうしようもないですし、ここは合わせるしかないと思いますし、やはり、先ほどお話しした浜崎のプロジェクトなども時間がかかります。だから、このスローペースがいいのかなと思いますし、自分もいろいろ覚えなれないし、やっていかないといけないので、むしろこのゆったり感がいいのかなと感じています。

田口／そうすると、地方のスピード感というか、じっくり構えないといけないというのは協力隊になる前に浜崎のプロジェクトで経験値としてわりとわかっていらっしまったという感じですか？

高橋／そうですね。

田口／そういう人をちゃんとつかまえておけるかどうかは結構重要だと思います。ちなみに、協力隊同士で、今14人いますよね。14人いるとやはりいろいろな人間関係があったり、その立ち居振る舞いが上手な人と、あまり上手じゃない人と、白神さんみたいに身の上相談的な誘導というのもあるし、たとえば協力隊同士で相談し合うということはあるのですか？

高橋／私は最年長になるのですが、いちばん年下の隊員とは親子ほどの年齢のギャップがあるのですが、本当に多種多様で十人十色だったりしますが、経験値も全く違うので、感じ方も本当に違います。14人もいると全員がひとつになることは難しいです。様子を見ていると2、3人くらいのチームに分

かれたり、目指す方向が一緒だったり、やっていることが一緒だったり、経験が一緒だったりというところで、14人の中でコミュニティができてその中で相談ごとというのがあったりするのかなと思います。

田口／藤井さんはどちらかという岡山全域とか、もっというと全国のこういうチームワークみたいなことをやっていると思うのですが、そういう立場から見て協力隊同士の相互支援、相互補完、相互相談とか、そのあたりはどういう形がいいかなと思っておられますか？

藤井／それはやはり、卒業生、先を行っている人と、協力隊の卒業生のリアルとして心の変化というのをやったことがあります、ある程度の基準があってプラスかマイナスか、上がって下がってみたいな話を隊員に聞いたことがあって、下がって上がるわけですが、別に下がるから悪いわけではない、上がる人は協力隊同士、もしくは地域外の人と話をして仲間ができるとか、共感性が生まれるところから上がって来る人が多かったです。

僕らもそうだなと、僕ももちろんそうだったし、岡山県から見ても地域内外ではなくて外の人と交流があって相談できるとか、14人もいれば気が合わない人もいるわけで、それは広く、せっかくこの協力隊、全国にいるわけですから、広く交流を持って全国に友だちを作る機会になると思いますし、OBを見ていると任期後に何か一緒にやったりということも出てきています。

そういう全国的なつながりも、いろいろな勉強会や集会があったりするので作るという。ただ、顔の見える範囲でつながれるといいのかなと思います。

田口／僕も全国の研修をやっていて思うのは、全国で集まってもたぶん・・・、フェイスブックとかでつながるといふのもあると思いますが、それより山口だったら山口県内とか、あるいは中国地方といったわりと行き来しやすいくらいのところでやる。

あとは藤井さんがおっしゃったように共感って結構大事で、高橋さんがおっしゃったすごく立場が弱いとか、いろいろまくいかないと悩ましいとかあると思います。担当職員は行政組織の一員なのでどちらかという少し守られている。でも、協力隊はすごく立場が宙ぶらりんで、地域からは行政っぽく見られているし、行政からすると違うと見られるし、自分は移住者だし、周りに相談できる人いない。

こういう時にどういうふうに関心してくれる相手を見つけるかどうかというのは結構重要で、萩には14人いると何人かいるかもしれませんが、今日お集まりの自治体の中でもひとりしかいませんとか、2、3人しかいません、しかも世代が全然違いますみたいな人たちが結構孤独な世界で黙々と戦っているんですね。

そういう人たちに対して、どういうフォローをしてあげるか。岡山は、藤井さんたちとかスーパーOBが結構たくさんいます。そういうことをどうアレンジしてあげるか、これから結構重要かなという気がします。

藤井／昨日、ある市の隊員が、全体のコミュニケーションがないということ、弱みにあげられていました。

まずはみんなで活動することをやりましょうということで、朝ご飯の会というのをやったんですね。それは結構よかったみたいですね。全体で何かやるということもすごくいいことかなと思います。

田口／意図的にこれは協力隊全体でやりましょう。協力隊の人ってかなり個性的な人が多いので、自分と気が合う人と一緒になっていく。これは実は多様性をどんどん排除してしまう可能性もあると言った時に、あそこは仕組みがよくできているから、なかなか真似ができないかもしれないけど。ちょっとあえて自分とタイプが違う人とかからむということが、風通しをよくしたり新しいクリエイティビティが生まれてきたりすることなのかなという気がします。

そういう意味で言うと、こういう場でプレゼンしていただくと、いい話がいっぱい出てくる。今日聞いていらっしゃる行政の方々、地域の方々のために、宇宙人みたいな協力隊員がいてどうしようとか管理が難しいという悩みも抱えられていますが、行政上の悩みと実際の活動上の悩みは違ってたりするので、それはひょっとしたら共感のネットワークや同情、そういうところで少しクリアできたりするのかなという気がします。

ですので、あまり管理とか業務ということを中心に据え過ぎてしまうと難しく、白神さんがおっしゃったように、何でもありな人たちとどうおつきあひするか。僕は担当職員の皆さんに「あきらめてください」と言っていますが、「業務は残念ながら14人いれば14倍です。スケールメリットはありません」と言っていますが、そういう意味でどこかであきらめて、「3年B組」は問題児が多そうなクラスですが、それを含めてどう楽しめるかがポイントだろうという気がします。

時間が少なくなってきましたが、おふたりから、任期があと少しという段階だと思いますが、この3年弱くらい活動して来て、こういうところにもう少しゆるさがあったら、さらに自分たちはいきいきと活動できたのになということがあるのかどうか、今日は萩だけではなくて全国から協力隊に関心のある人たちが集まっていますので、行政の方が多いのですが、行政の方たちはもう少しこういう感覚を持ってくると隊員としても居心地がいいと思うところがあったら紹介していただきたいと思います。どちらからでもしゃべりやすい人から。

吉田／そうですね、ゆるさというか、藤井さんもおっしゃっていたのですが、僕らはあとから制度などを知ることが多くて、こういうことだったのかとか、予算のこととかも全然わからずにいてやっとわかってきたなという感じです。そこにミスコミュニケーションが生まれていて、聞いてないよとかいう状況をよく見るので、最初に2日か3日くらい日を設けて制度などを教えていただけるともう少し良かったと思います。

あと、行政の方は本当に業務が多くて、しかも新しいことを考えることも求められます。、そんなの無理じゃないの?と思います。そういう時に、僕ら地域おこし協力隊や民間の方々に目を向けて、うまく利用してくれればいいと思います。と同時に、僕ら地域おこし協力隊や民間の方々も自分たちで考えて、人のせいにせずに、行政のせいにせずに、動かないといけないと思います。一人ひとりと対話するところのほうがいいのか結構思いがあって、では何かやっているかという、僕も含めてなかなか動いていない。

だったら僕はどうすればいいかという、松下村塾のように、そういう想いなんかを吸い上げる場所を作れたら良いと思います。明治維新というのは江戸時代にはみんなふつふつと持っていた想いなどがあそこで爆発したんだと思うのですが、そういうサードプレイスがあればお互いにもっとうまくいくのではないかと思います。

田口／だから言ってしまうと、みんな自分の中で抱え込むのではなくて出せる場所を作りましょうということ。

吉田／もっとオープンに。愚痴るのではなくて、もっと話をして誤解をなくしていくことが大事で、僕はそういうまちに住みたいと思います。まちづくりがうまくいっているまちはそこがうまくいっているのかな。多様性を認め合っているというか。そこに限るのかなと思います。

田口／実際に今は、そういう場所ができている感覚を持っている?

吉田／いえ、これからもっと作っていききたい。もっとそういう場所があれば。

田口／一ヶ所ではなくていろいろな場があって、その多様性もあったほうがいいよねという話ですね。

吉田／みんなで作っていきたいというか。広がって
いければよいなど。

田口／なるほど。協力隊とか地域とかそういう立
場ではなくて、そういった立場を1回どこかで全部
おろして、ひとりの人間としてお互いにコミュニケー
ションをとれる場所を作っていこうということです
ね。

吉田／そうですね。みんな、協力隊は特に、先ほど
話されていたスピード感ではないですが、あせて
いるので。僕も最近、うなされて目が覚めるので。
何かそういう場所があればなということです。

田口／高橋さんはどうでしょう？

高橋／それなりに年も取っているので経験値もあ
りますので、こういう状況ならこういうふうによって
いくかなという自分の中でのスキルもあると思いま
す。

民間と行政の組織の違いというのはあると思いま
すが、組織は組織なので、同じこともあります。
予算の話も出ましたが、協力隊は若い人が多いの
で、予算編成に携わったことがある人は少ないと思
います。それなりの役職になってくると当然予算編
成もするし、私は前職で行政の人と取引がありまし
たし、いつ行政のお金が動くかも知っています。

それで、厳しいことをいうと、それくらいのことは
自分で勉強しておくべきだと思います。仕事をする
んだったらそれくらいのことは当然ですね。(笑
い)

ですので、事情もわかっていますので、自分の事
業をなしえるためにはどうしていくかという術も
持っていますので、むしろ白神さんをはじめとした
萩市の協力隊を管理している部署の職員さんには、
本当に好きにやらせてもらっているので感謝し
かないです。

ミスマッチがあった時も親身に相談に乗って
くれて、異動もかなえてくれましたし、本当に萩市の
担当職員さんにはありがたいと思っています。

田口／はい、ありがとうございます。白神さんの話
を聞いていると柔らかさそうだというのがよくわかり
ます。

藤井さんはもう少し大きい話を最後にしていただ
きたくて、担当職員としてこういうことをちゃんと気
にしてやらないとまずいよというあたりとか、ある
いは、もう実際に運用している人のほうが多いと思
いますが、運用上こういうことに気を使ってくださ
いねという最後のメッセージをいただければと思
います。

藤井／担当職員が気を付けること。一つは、吉田さ
んもおっしゃいましたが、最初のコンセンサスを
ちゃんととってほしいということです。もちろん隊員
も努力をしたほうがいいし、勉強もすべきですが、
担当者目線としてはわかっているだろうと思うこと
をちゃんと伝えることです。

それは、今までの協力隊員としての10年間の積
み上げもあるのでOBやOGもいますし、失敗事例
も成功事例もあります。そういったことを最初に提
示するという。お互いにサポートです。わからない
こともあるけど一緒に作っていこうということです。

それから協力隊の仲間がいてほしいです。要は
協力隊が来た時に、隊員は横のつながりも、OBが
いて縦のつながりもあるのですが、最後に守って
くれるのは役場職員だと思います。地域での立ち
位置が難しいということもありますので、行政職員
が最後は守るよという姿勢、ことばでもいいですが
かけてもらおうと隊員はパフォーマンスを発揮しや
すい

です。
それから、気をつけることはいっぱいありますが、
今までの失敗事例やこうしたほうがよかったか
なとかまとめていますので、それもぜひ使っても
らったらなと思います。

田口／ありがとうございます。予算とか行政の仕組
みをちゃんと説明している地域って少ないです。そ
れから、おふたりとも「最初に」といいましたが、
最初に全部説明されても情報が多すぎて忘れてしま

います。

だから、僕は逐一だと思っていますが、確かに勉強しなさいということも当然ありますが、二度三度、お互いにコミュニケーション。吉田さんがおっしゃったように、どれだけコミュニケーションをとっているかということが悩みの解消の上では重要ですし、高橋さんのやつも、たぶんコミュニケーションを取っていなかったらただのワガママだととられるかもしれません。

そうではなくて、コミュニケーションをとってればその人の人となりもわかるし、この人はここがミスマッチだよなということも理解されやすい。根本は日常的なコミュニケーションだと思います。そういう風通しをよくしていくということは、ぜひ今日お集まりの協力隊の皆さんも、あるいは地域の代表としていらっしゃっている方ももんと抱えるのではなくて、思ったことは口に出しながらお互いの認識を深めていくことをしていただけるといいかなと思います。

ちょっと時間がオーバーしてしまいました。申し訳ありません。今日はいろいろな事例を包み隠さず話していただいてありがとうございました。それではパネルディスカッションをこれで終わりたいと思います。お疲れ様でした。

萩市現地視察

萩・明倫学舎



とまーし萩駅の道

